□随　想□

登山趣味

川村大膳

東京から友人がくれば、あるいはアメリカから友人がきても、わたくしは六甲山へ案内することにしている。そして文句なしに喜んでもらっている。

霧にけむる断崖、したたる緑、ひろびろとした山ふところ、それに美しい花……。大都会のすぐわきに、四季を問わずこんなすばらしい山岳地帯をひかえているところは、世界中にめずらしい。

神戸の人々がこの手近な、しかも山趣味の満喫出来る裏山にひきつけられるのは、しごくもっともなことであろう。そこには人々の、詩情も、リクリエーションも、冒険心も即座にみたしてくれる大自然の幸がととのえられ、人々は何の障碍もなく、自然のことのように山に吸いよせられてゆく。

わたくしの学んだ神戸一中には、古くから遠足部というのがあり、健脚にまかせて裏山を歩きまわった。それは多分に校風を反映した質実剛健なもので、にぎり飯を腰に、軍歌を口ずさみながら一日を鍛錬にかたむけるもので、六甲越えの有馬競走や夜間の京都行軍などが年中行事として剛気の風をやしなっていた。ところが、わたくしが三年生の昭和六年のころ、遠足部に平行して近代的な登山をこころみる山岳部が誕生し、ロッククライミングやスキー練習をし、おもに日本アルプスを対象とするようになった。当時はシュミット兄弟のマッターホルン北壁初登頂に血をわかせ、また海外の山岳雑誌をむさぼり読み、仲間のうちには将来のヒマラヤ行きを口にするものも出てきて

いた。

このように、地元の美しい山が手びきとなって登山趣味を発展させたのは、たんにわたくしばかりでなく、神戸に多くの有能な登山家がそだったのは、まったく六甲のおかげであると思う。

一九六一年に、南米ペルー・アンデスへ遠征したとき、右の事情とまったく正反対なかの地の様子に接し、いよいよその感を深くした。

いうまでもなくペルー・アンデスは、六〇〇〇米級の氷の峻峰を随所に擁し、山容の美しいことまことに岳人の垂涎おくあたわざるものがあり、各国から遠征隊が殺到するさまは、さながらオリンピック競技に匹敵するものがあろう。しかし不思議なことに、地元のペルーには、登山趣味は殆んどかえりみられず、ペルー山岳会にしても、会員わずか二十数名という貧弱なものであった。

「楽しいスポーツがほかにあるのに、なぜ危険な山登りなんかするのか」

「金鉱でも見つけたいか」

というような珍問にもしばしば出くわした。

船がカイヤオの港に近づくころ、目にいる風景は単調な砂漠と黄色い砂山ばかり。船の周囲にむらがる水鳥は、悪魔のような浅黒い巨大なペリカン。「ギャー」といってとびかう光景にまずどぎもをぬかれる思いである。かの十六世紀に、こんな不毛の土地へ乗り込んだスペインのコンキスタドール（征服者）達は、よほどインカ帝国の黄金や銀塊に闘魂をもやしていたにちがいない。

南米の太平洋岸は、一木一草もそだちかねる砂漠の連続で、アンデスを源として大平洋にそそぐ幾筋かの小河川のへりが、申しわけていどに緑をそえているだけであり、その砂漠地帯を縦に、延々とパン・アメリカン・ハイウエーが通じている。首都リマもこの砂漠の中に出来た都会である。さすがにリマは目をみはるような南欧風の美しい近代都市である。しかしその周辺の山を見よう。まるで砂礫の起伏ではないか。

市の背景にそびえるサン・クリストバールの丘にしても、頂上に十字架をおしたてて信仰の象徴にはなっているものの、山麓は町からはじき出された貧民の穴居部落が群集しており、リマの人々は、危険だから近ずくなとわれわれに注意をあたえる。これでは町の人々に登山趣味などそだつはずがない。山は殺風景なもの、おそろしい所、悪党の巣くつ。さらに困難をおかしてゆかねばならぬ奥地は、金銀を目あてにした山師の勝負どころとしか見られないのは、もっともなことである。

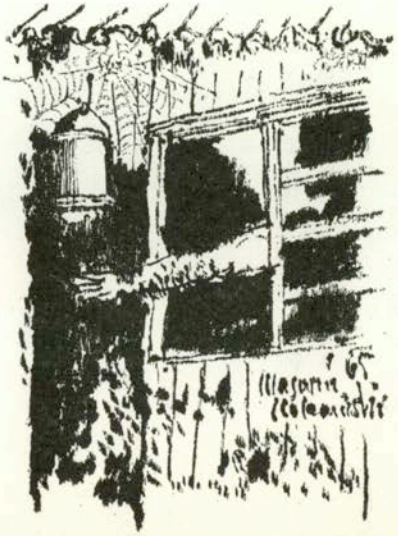
たしかにペルーでも外国からの遠征隊の刺激をうけて、近代アルピニズムがレジャースポーツの花形であることを識者はしっている。われわれに対する歓迎もさかんである。しかし自ら山ふところにいだかれて、自然を賞味するというような感覚には乏しくサッカーやその他のスポーツがあれほど花やかに成長する国柄でありながら、若人達には登山趣味は一向にそだたないらしい。

外国帰りの人がよく日本の良さを見直しているのに出くわす。外に対するあこがれが強すぎた反動とも考えられるが、あながちそれは、住みなれた土地に対する愛着とか年のせいだけでかたずけられるものでもなさそうである。〈関西学院大学教授〉

□随　想□

夏の夜話

白川　渥
え・中西　勝



先夜、久しぶりに昔住んでいた東神戸の高台の町を散歩してみた。三十年前、その辺はまだ人家もまばらで、畑あり池あり、夏分に蛍も舞い込んでくるほどの閑静な住宅地だったが、いまはぎっしり屋並が建ち混み、当時の面影もない。畑一つ隔てた向うの道は、石ころのだらだら坂だったがそこも広々としたハイウェイと打ち変って、車のライトがめまぐるしく往来している。大阪方面からの六甲登山ルートになっているのだった。

その街角で、私はふと三十年前の夏の夜のことを思い出した。当時、役所勤めをしていた私は、何かの用で帰宅が晩くなった。阪急電車の六甲駅を降りたのは、もう終電車近くであったろうか。

十人ほどの下車客が、途中の辻々で散り散りになった。誰も家路を急いでいる。暗いだらだら坂まで帰った時は、前を行く白いワンピースの女と私と二人きり。彼女はいやに速い。一足先に改札を出たのだが、それにしても、男の私が追いつけぬほどの速度である。むろん、当時は街灯もなくテレビもない。あちこちの家はもうシンと寝静っ

ている。

二人の靴音が闇の石ころ路にひびいているだけだ。やっと彼女の足に追いついた時、私はちょっと石ころにつまずいた。

とたんに、前の彼女が途法もない高声を放った「キャアッ！」叫ぶなり、バタバタと駆け出して行った。

私は面喰った。事情を呑み込むまでに、ちょっと手間がかかった。

私は彼女を誤解させたようだ。彼女の方では、私に、尾行られているものと思い込んで、ビクついていたらしい。いやに足が速かったのも道理だ。全身を耳にして、いまかいまかと背後の男を警戒しているところへ、私がつまずいたのだ。てっきり、とびついて来たものと狼狽えたらしい。

とんだ罪なことをしたものだ。さぞ怖かったであろう。どこのどなたか、知らない。いずれ、わが家の近くに住んでいたBGでもあろうか。

女の背後でめったにつまずいたりするものではない。——三十年前、この道で得た教訓である。

×

もう一つ、これは私の友人のK君を怖がらせた話。K君は某大学の講師で、体重二十貫に余る大男である。その彼が正に腰を抜かしたというのである。

K君はまだ独身で、やはり阪急沿線のさる老人の家に下宿している。電車が通るたびにガタピシ鳴るほどの古家だそうだが、トイレの手洗いも、バケツのような昔風のアレが、雨戸の外にぶら下がっている。その雨戸には、小窓が仕切ってある。用心のために、手だけ出せるほどの狭い窓だそうだ。

彼は、二階の住人である。夜中はめったにトイレに立たぬ主義だそうだが、その夜は夕食に飲んだビールのために尿意を催し、やむなく階下のトイレに立った。

さて、用すまして、手を洗おうと、その小窓から突き出した時、その手が闇の中から何者かにソロリと摑まれたのである。ギョッとして引こうとしたが、尚ジンワリと握ってくる様子。

寝呆け眼が、いっぺんに覚めた。いや、恐怖で全身が凍った。二十貫の大男がヘナヘナと廊下に崩折れた。軽い失神状態のまま、どれほどかたって、下宿の老人に起されたが、さっぱり腰が立たない。

「Kさん、どうしましたか？」

「出た、出た……。」

ただ雨戸の外を指さすばかり、老人が外の闇をすかしてみると、白いユカタの女がフラフラと垣の向うへ消えてゆく。

「ありゃ、××さん宅のキ印ですがナ」

バケモノの正体は、近所の精神病の主婦であった。思うに、K君がトイレの灯りをつけたので、その灯に誘われて来たらしい。そこへヌッとK君の手が出て来たので、ただ何となく握ってみたのであろう。

「腰が抜けるって本当ですね」

その経験を、K君は大まじめに告白する。大学講師のインテリでも、或る一瞬は、バケモノの存在を肯定するのだからユカイである。〈作家〉

□インタビュー／中村光夫氏を訪ねて

港町神戸に思う

写真は摩耶山にて

7月の初め、文芸評論家の中村光夫さん（鎌倉在住）が神戸にこられました。といっても、観光旅行ではなく、もちろん仕事のための来神です。本誌編集部では早速、オリエンタルホテルに宿泊中の中村さんにインタビュウを申し込んだところ「これから摩耶山へ登るつもりなんですが、よろしければ一緒に行きませんか」というご返事。かくて、雨上りの美しく澄みきった摩耶山で、神戸の印象、文学の話題などをめぐって、いろいろとお話をおききすることができました。

最初に中村光夫さんの経歴と横顔を簡単に紹介すると——

明治44年東京生まれ。本名、木庭一郎。昭和10年3月東大文学部仏文科卒業。東大在学中から小林秀雄氏らの推せんで、「文学界」に「ギイ・ドモウパッサン」「永井荷風論」を発表、文芸時評を連載するなど、早くから文芸評論の筆をとってこられました。最近は、小説、戯曲の分野にも仕事を拡大し、「我が性の白書」「汽笛一声」などの問題作を公表。特に後者は戯曲部門の読売文学賞（昭和39年度）に輝く秀作です。

――こんど神戸へ来られた目的からおたずねしたいのですが。

「実は今、長田秋濤という人のことを調べているんですよ。もともと伊藤博文の側近だった人で、ちょっとした事情があって、晩年の不遇時代を神戸で過したわけですね。その旧宅が垂水にある。現在、そこに大阪市大教授の岸本通夫さんが住んでおられるということなので、昨日は岸本さんをお訪ねしたような次第です。長田秋濤という人は日本で最初に『椿姫』を訳したといわれています。この摩耶山のケーブルカーなども、もともと秋濤が最初に立案していたらしいですね。まア、そういうことで、取材のために神戸へ来たわけです」

――そうすると神戸は初めて？

「いえ、いえ。何度か来ていますよ。初めて来たのは、昭和13年のことです。フランスへ留学するときに、神戸から船に乗りましたからね。今と違ってその頃は、フランスの船は神戸までしか来なかったんです。しかし、戦前と比べると、元町などはずいぶん変りましたね。港町としてみても、横浜などとはだいぶ様子が違いますね。横浜にはもう港町の特色がなくなったという気がする。その点神戸は、港とそれに付随するものがちゃんと生きている感じがありますね。いっぺん、船で神戸まで来てみたいと思っているんですけどね」

――先生は芥川賞をはじめ、いろんな新人のための文学賞の選考委員をしておられますが、最近の新人に共通した傾向というものを感じられますか

「いや。むしろ、共通した傾向がないという気がします。みんな思い思いに勝手なことをやっているようですね。たぶんだれもが迷っているのではありませんか。

私小説はダメだということになって、みんな話をツクルことばかり考えているようです。しかし本当は話をツクルのは、むずかしいことなんですよ。私小説であろうが、つくり話であろうが、本当のことというのは書けるものではないのです。それは、読者の問題としていうと、小説のリアリティ（真実性）というものについて、現在の読者が大へん気むずかしくなっていますね。だから、なまじっかな、いいかげんなつくり話では、その気むずかしさを破れないというところにきているわけです。だから、小説を書く新人にはどうしても厳しい工夫が必要になってくるでしょう。つまり、つくり話をつくらなくてはならないという点での内部作業が、今はとだえているのじゃないかと思いますね。それをやれば、一頭地を抜いた新人が必ず出てくるのではないかと思いますね。」

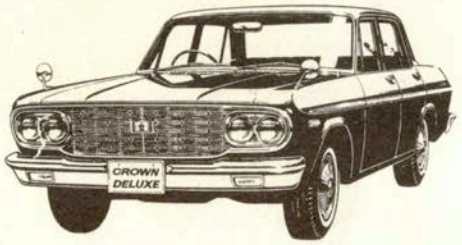
文学を志す新人への貴重なアドバイスをおきして中村さんへのインタビュウは終りました。

洋服店
神戸　34－0693
大阪 231－2106

'65マリンルックサングラス

神戸眼鏡院
元町3丁目 ㉝ 3112 ㊴ 1443
㉝ 0551（貿易部）

トヨペット
クラウン デラックス



RS41－B 〈新設〉自家用普及型 ¥ 837,000
RS41－CB〈新設〉トヨグライド付 ¥ 897,000
RS41……デラックス ¥ 974,000
RS41－C……トヨグライド付 ¥1,034,000
お問い合せは下記の営業所へＴＥＬでどうぞ

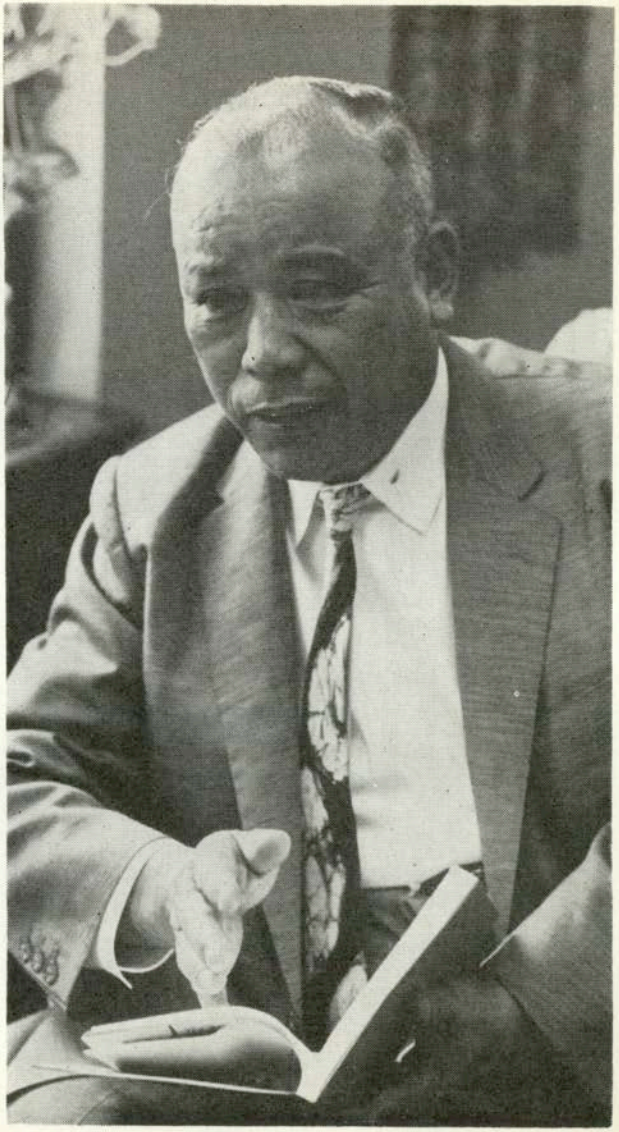
兵庫トヨタ自動車株式會社

本社・神戸工場	神戸市長田交差点	神戸(56)5051
尼崎営業所	阪神国道玉江橋東	大阪(481)9501
西宮営業所	阪神国道北今津東	西宮(2)6905
三宮営業所	神戸三宮交差点東	神戸(23)5821
神戸営業所	国鉄兵庫駅南50米	神戸(68)6781
中古車センター	国鉄兵庫駅南50米	神戸(68)6781
姫路営業所	神姫国道市川橋東	姫路(23)2781
豊岡販売所	豊岡市高雄通 102	豊岡 4174

□神戸っ子放談□

地元産業の育成こそ大切

原　泰良〈神戸電鉄株式会社社長〉



原泰良氏は、神戸電鉄株式会社社長。実業家としての多忙な職務のかたわら、随筆、絵画をよくし、げんに神戸新聞に毎週一回ご執筆中の「四百字の時評」が好評を博している。「百舌」「柊」など随筆著書も多い。絵の方もくろうとはだしで、何度か国展入選の実績をもっておられる。

人生の大半を神戸ですごす

「私は純粋の神戸っ子ではないんです。私の故郷はもともと播州なんですよ。話が長くなるけれども、足利時代に赤松則村を祖先とする赤松一族というのが、播州一円を割拠して、しかもその勢力は摂津にまで及んでいたわけです。つまり、豪族ですね。この豪族群の中の広瀬

長水城主からわかれた神崎郡の永良城主が私の祖先なんですよ。それでまあ、原氏二十代の間ずっと姫路にいついていたというわけです。

大正11年の4月に三十八銀行にはいりましてね。今の神戸銀行です。その間、網干支店長、姫路支店長などをつとめて、昭和30年に取締役に就任しました。退任したのが昭和34年の11月ですね。勤めの間、私はずっと姫路の自宅から神戸に通っていたわけですよ。特に戦後はそうだった。だから、ある人が『自分の家から通いつづけて重役になったというのは、あなただけだろう』といっていましたね。みんな転勤とかなんとかで、たいがい江戸っ子になったり、大阪っ子になったりするものですが、その意味では私はずっと神戸っ子だったといえますね。家は姫路でも人生の大半を神戸ですごしたということになります」

神戸電鉄入社のいきさつ

――原さんが神戸電鉄に入社されたのはいつですか。

「昭和34年11月に副社長としてはいったわけです。こういっては悪いけど、神戸電鉄が経営困難で、どうもお手上げのかっこうで、SOSが出ていた状態だったんですね。それで、神戸財界のなかから、だれか適当な人を選ばなくてはならぬということになって、その人選の結果、私に白羽の矢がたてられたというわけです。率直にいって、あまり乗り気じゃなかったですね。はなはだ個人的なことだけれども、一応神戸銀行の重役も無事つとめあげたわけですし、この上は家にいてのんびりしていた方が楽だと思ってね。だから、最初は辞退したんですよ。しかし、財界があげて私を押してくださったといういきさつもありましたし、一方で私も、神戸電鉄をこのまま放任しておいたのでは衰退は目にみえている、これは地元産業育成の面からも、神戸の繁栄の面からも、決して好ましいことではない。ここで微力をつくしてこそ男子の本懐というものではないか、そう思い直すようになって、改めてお引き受けしたということなんです。ただ、入社する時には、私のいうことをきいてくれぬのなら、鉄道も線路もぶっこわすからそれでもいいか、というくらいの覚悟でのりこんだんですよ。

だいたい事業というのは、なんにしてもゼロから出発するという場合はまだいいのですよ。しかし、マイナスから出発してそれをプラスにまでもっていくというのは難事中の難事ですね。それでも、有馬のヘルスセンターにしても、観光バスにしても、おかげさまで大成功をおさめることができました。

これは私の信念ですが、理想的な会社というものは、資本と経営と労働の完全な三位一体が出来上ってこそ実現すると思うのですよ。この三者が、融合調和した三位一体が生まれた時にこそ、はじめて会社は大きな力を発揮できる。それがうまくいかないと、ゆくての困難や荒浪をのりこえることはできません。社長になったのは、昭和35年5月ですが、当初の信念に少しも変りはありませんね。」

鈴蘭台から有馬にかけて大ニュータウンをつくる

「今さらいうまでもないことですが、有馬沿線には、国宝とか重要文化財という立派な文化遺産がたくさんあるのです。箕谷の無動寺とか上淡河の石峯寺、あるいは小野の浄土寺など、立派な古寺古仏があるわけですね。瑞宝寺の紅葉なども、これは全国的に有名な名所といえるでしょう。神戸でここほど観光に適切な場所はないと思いますね。神戸の都心からわずか30分ほどで、裏六甲の幽すい境や東播の高原地帯にはいれるわけで、その農村風景や田園風物などには、捨てがたい自然の詩という趣きがある。現在はもちろん、将来の自然観光の大きな遺産だと思いますね。その意味でも神戸電鉄の使命は大きいものがあると考えているわけです。

同時に私は、有馬沿線に一大ベッドタウンをつくりあ

げたいと思っています。神戸は大へん住みよい所ですが欠点をあげれば夏が暑すぎるということでしょう。その欠点を解消できるのは、有馬沿線しかないと思うのですよ。そこで、今、鈴蘭台から有馬周辺にかけて、ベッドタウンをつくるべく、土地開発に力をいれています。まあ、軽井沢ほどにはいかないでしょうが、大へん住みよい町になることは確実ですね。

しかし、妙なものですね。私は神戸電鉄に入社して、べつに因縁もないと思っていたのですが、いざ就任してみて驚きましたね。つまり、神戸電鉄の沿線が、私の遠祖赤松氏の故地播磨、摂津にまでまたがっているのですね。沿線を一巡してみると、あっちこっちで赤松氏の遺跡にぶつかるのですよ。だから、まるで父祖の郷土に来て、その交通路を自分が預っているような気がしましたね。神戸を北へ伸ばしていくという仕事は、自分の祖先が活躍した場所を開拓することになるのだ、それが自分のつとめだと、そう今では思っていますね。」

陸のかけ橋も必要です

「最近はよく斜陽神戸ということばを耳にします。しかし、そんなことをいいだすのはよくないと思いますね。もともと神戸という町は汽船会社とか造船会社とか、いわば船関係の事業でなりたってきたわけです。ところが今は船がふるわないから、それで斜陽神戸なんていうのでしょうな。

しかし、だからといって、みんな東京へ移るというのは困りますね。やはり自分の分野でベストをつくすことを心がけるべきではないですか。つまり、お互いに協力して神戸という地元を発展させることが大切なんだと思いますね。私の場合でいえば、神戸電鉄の仕事をつうじて神戸の発展に寄与したいと思っているわけです。

我田引水みたいに思われるかもしれないですが、新幹線はあくまで六甲山の北を通すべきだというのが私の主張なんです。そうすれば、派生的に道路もどんどん生まれますね。それだけ神戸がぶあつくなるわけですよ。夢のかけ橋には、もちろん賛成ですが、同時に陸のかけ橋をつくる必要がある。そういう世論を盛りあげたいですね。だいたい従来は、神戸の開発の上で六甲山が障害物のように思われていたわけですね。これからはそういう考えではいけないでしょう。むしろ、六甲山を利用するくらいの考えで進む必要がありますね。」

百舌鳥の心意気

「絵のことですか？　習い始めたのは、12年ほど前からですね。もちろん、いろんな先生について習ったわけです。国画会の審査員の先生にも師事したことがあります。春陽会の伊藤慶之助先生からも手ほどきを受けましてね。昭和29年の4月に「朝の窓」という作品が国展にはじめて入選して、その後何度か選ばれましたね。

謡もやっています。しかし、けいこごとというのは、なんといってもその道の名人に教えを受けるようにしないとだめだと思いますね。へたな先生に習うと一生ウダツが上らない。（笑）　先生の悪いクセがつく。ゴルフでも謡でもそうですね。

『百舌』という随筆集は昭和38年に出版したものです。題名の意味ですか？　まア、つねに鳳凰を夢みて生きてきたけれども、結局自分は百舌にしかなれなかった、ということなんですよ。（笑）　しかし、百舌は百舌なりに、精いっぱい努力してゆこう、今はそういう気持です。この本のなかには、自分のこと、祖先のことなど詳しく記録してあります。原氏四百年の体臭というものは、私のなかに流れている。子孫にもそれは受け継がれてゆくでしょう。そういう伝統の息づきというものを残してゆきたい、その願いをこめているわけです」

（文責編集部）

経済ポケット ジャーナル

クズネック製鉄コンビナートに賛辞

神戸製鋼の外島社長は訪ソ鉄鋼使節団（団長永野富士製鉄社長、団員十二人）に参加、六月十五日から七月三日まで訪ソ、その後パリ、ハンブルグなどを回って七月十日に帰国した。同使節団はソ連国家科学研究活動調整委員会およびソ連国家計画委員会鉄鋼非鉄金属委員会の招きによるもので、鉄鋼業界としては初の訪ソ大型使節団だった。

一行は十五日に訪ソしてからクズネック製鉄コンビナートなどソ連の製鉄工場を視察、鉄鋼技術交流などについても意見を交換、日ソ貿易拡大など全般的な日ソ経済問題についても協議、大きな成果をあげた。

ソ連の赤い商人「ミコヤン」氏の工場見学、連続鋳造設備の導入などソ連と関係の深い神鋼の外島社長は初の訪ソだが、特にクズネックの製鉄コンビナートに関心が深かったようで、「同コンビナートでの鉄鋼生産等の急激な生産増大が印象的だった」と鉄鋼生産の規模の大きさに感心。

神戸市、消費者行政に本腰

〝豊かな消費生活〟をモットーに消費者行政に力を入れている神戸市は冬木神戸市中央卸売市場長を団長とした生鮮食料品海外事情調査団を七月から八月末まで欧米に派遣した。

神戸市が消費者行政確立のため、海外に調査団を送るのはこんどが初めてだがパリ、ロンドン、ジュネーブ、アムステルダムなどの欧州の主要都市、ニューヨーク、シカゴ、ボストン、ロスアンゼルス、ハワイなど米国の代表的な都市の市場を視察する。調査の対象は市場機構、取り引き方法、市場経営、消費者行政の進め方などが中心で、欧米の近代的な大農場も視察する。冬木団長は「消費者行政を改善するのがねらいで、じっくり勉強してきたい」といっていた。

河野一郎氏の死を悼む

「一度は首相にして実力を発揮させたい」と一般国民がひそかに思っていた実力者の河野一郎氏が七月八日突然死去した。

日ソ国交回復後、日ソ漁業交渉に果した役割は大きいし、それ以上に建設相としての足跡は国民にフレッシュな印象を残しているが、彼の行動半径、思想は幅広く、彼の死に際しては中共からも悲しみの意が表された。早稲田大学の出身で、文子通りの熱血漢、メキシコオリンピックをめざして、選手強化、国民体位の向上に期待が大きかっただけに惜しみても余りある。

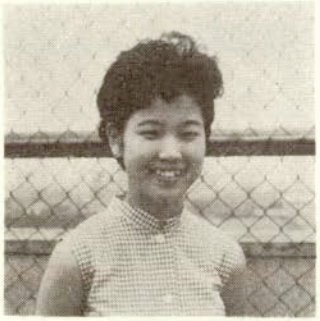
河野さんと神戸の因縁は浅くない。まず明石―鳴門架橋。彼が「明石ルートが最優先だ」と言明し、原口市長など大喜びしたが「架橋の道は遠くなったかもしれないが。架橋実現こそ河野さんの遺志にこたえることだ神戸財界も浅田神戸商工会議所会頭はじめ河野フアンが多かっただけに、惜しむ声が圧倒的である。

瀬戸内の発展促進で手をつなぐ、神戸と四国

神戸商工会議所は七月六日、高松市の国際観光ホテルで四国商工会議所連合会四国経済連合会、四国産業立地推進協議会と神戸、四国経済懇談会を開いた。これは神戸と四国の商工会議所が提携、協力して瀬戸内の発展を促進するのがねらいで、商工会議所ベースの交流は、これが初めて。

会議には神戸から浅田会頭ら二十四人、四国から平井四商連会長、中川四経連会長ら四十人が出席、四国の経済開発、四国と神戸との交流などの共通問題を協議、今後、緊密な連絡をとって交通体系、産業立地、流通、貿易、観光などの問題を解決することになった。浅田会頭は会議について「初めてなのに思っていたより成果が上った。今後は陸続きのつもりで経済交流したい」と喜んでいた。

＊KOBE オフィス・レディ＊



池田　悦子さん（21才）
安田生命神戸支社・勤務

夢野台高校を卒業してまる三年。でも会社不では、まだまだ子供扱いされるともちょっと習満顔、ペロッと舌を出す。ストレス解消通った甘して一年間、生田警察署へ剣道に入か。今は、おしとやかにと、手芸、洋裁を習い、好きな絵はずっと続けていきたいという、八重歯の可愛いいチャーミングなお嬢さん。

るぽるたーじゅ・コウベ ⑬

湊川新開地

松原新一　撮影／緒方しげを

久しぶりに新開地を訪ねた。ほとんど7年ぶりである。訪ねてみて、ほんとに懐しい気持がした。三宮で遊興にふける若者たちを、今は三宮族と呼ぶらしいが、そのでんでいけば高校生の頃の私など、典型的な新開地族の一人だった。当時、板宿に住んでいた私は、映画をみるといえば決まって新開地へ行った。そこで映画をみて、なんという名まえか忘れたが、汽車のなかみたいに細長い食堂で50円のカレーライスを食べた。それが私のハイティーン時代の唯一のレジャーだった。出店で金魚すくいをして80匹ほどすくっても紙が破れず、おばさんが「あんたは金魚すくいの天才や」と呆れていたのを思い出すのである。湊川公園の遊戯場に射撃の遊びがあって、赤鬼のヘソにたまがあたると、鬼がうーっと唸り声をあげるしかけになっていた。私がはじめて喫茶店というものに足を踏みいれたのも、新開地だった。聚楽館の前に、白馬車という音楽喫茶があって、ガールフレンドに誘われてはいった。やかましいジャズのレコードが流れるなかで彼女が別れ話（？）を切りだしてショックを受けたから、白馬車という名前をよく覚えているのである。三角公園の所でバスを待っていたら、横から変な男が出てきて、「パチンコでみんなスッてしもうた。すまんが百円貸してくれ」というので50

ヘルスセンターの先駆けといわれる湊川温泉劇場

円しか持っていないと答えると、「お互いにぴーぴーやな」と、おもしろくなさそうな顔をしてどこかへ行ってしまった。そんなことを、今もよく覚えている。どういうわけで新開地から足が遠去かるようになったのかはっきりしないが、いずれ神戸の中心街が完全に三宮に移行した事実と関係があろう。しかし、こんどルポの仕事で久しぶりに新開地をぶらついてみて、新開地もずいぶん明るい町になった、という気がした。

◇　◇　◇　◇

ぶらり、と湊川温泉劇場にはいった。松竹劇場の所を少し北にあがると古本屋がある。その角を奥へはいった所が湊川温泉劇場である。入浴料と映画の券が合わせて百二十円。

素手で飛びこんでも、65円払うと手ぬぐいと石けんを貸してくれるから大丈夫である。そのうち石けん代が5円、保証金が50円、タオルの使用料が10円となっており、タオルを返せば50円は戻ってくる。

広い脱衣場だ。普通の銭湯の倍くらいはあろうか。午後一時過ぎというのに相当の入りである。老人が多く、中年の紳士ふうの客も多い。浴室には円形の浴そうがあり、それが三つに仕切られていて、それぞれ深さも水温もちがう仕組みである。浴室にあおむけに寝ころんでいる人がある。ハゲ頭にタオルをのっけて、なにやら浪曲ふうのものを唸っている人がある。風呂につかりながら盗み聞いた会話をひとつ。

「きょうはまた、会社はお休みで？」

「へエ。さぼりましたんや」

「たまには息抜きもよろしいわな」

「私らしょっちゅう息抜きしとるようなもんで」

「なにをおっしゃいます。けど、なんですなァ。こないに不景気やと、お勤めにも精が出ませんわなァ」

「そうです。ボーナスかて雀の涙みたいなもんですわ」

「うちらひどいもんですわ。先月なんか店の経費も出んようなあんばいですわ。お客さんにはすまんこってすけど、値上げせんわけにはいきまへんなァ」

「ご互いにいやな世の中になりましたなァ」

百円出せば三助が体を流してくれる。風呂からあがると、肩のこりをほぐしてくれるオートメーションあんま器がある。10円ほりこむと、ゴトゴト肩を叩いてくれる仕掛けだ。それでもの足りない場合は、マッサージを頼むとよい。2階にマッサージ室があり、あんま料は三百円。主に身体障害の人たちが働いている。他に理髪室も美容室もある。至れりつくせりのサービスである。

それから喫茶店があり、食堂があり、売店がある。風呂上りに関東煮を食べるのがおいしい。売店には神戸名物のお土産品を中心に、水鉄砲などの子供用おもちゃを売っている。子供がお風呂で使えるおもちゃをそろえているあたり、なかなかぬけ目がない。3階が映画館。私はそこで「波影」など3本の映画をみた。平日の昼間というのに座席がないくらい混んでいるのに驚いた。風呂にはいって、マッサージを受けて、映画を3本見て、四百二十円ですむ。とにかく安い。こういうところに、新開地の面目があるといえようか。

売店のおばさんから聞いた話をひとつ。

「ここは朝の六時半から夜はだいたい12時頃までやっています。お客さんはいろんな人がいて、いちがいにはいえませんね。でも、しいていえば会社の夜勤明けの人とか水商売の人、それからあんこの人などが多いですね。パーテンさんなど、ここのお風呂で汗を流して、髪をきちんとしてもらってそれから出かけていくという人が多いです。それからタクシーの運転手。会社をさぼってここで半日ブラブラしていく人。団体の観光客。いろいろです。ときどき、夜なかの一時頃に押しかけてきて、水商売の人ですけど、いれろ、いれないで押問答するときもありますね。でも、そう大したトラブルも起こりません」

事務所で今西さんから聞いた話。

「ここは昭和の初めからあったのです。若い人で戦後に生まれたものと思っている人が多いようですが、そうじゃありません。昔はじゅうたんを敷いて寄席をやっていました。戦時中、昭和18年頃と思いますが、燃料不足などのために経営不振になって、一時閉鎖したんです。それでその間、この建物は兵庫警察署が使っていましてね。これは不燃性の建物だったものだから、警察にはもってこいでした。昭和20年大空襲の時にも、警察官全員が防火にあたって、あたり一面が焼野原になったのにここだけは助かったんですね。しかし、戦後は、もともとこれは神戸の名物だからやはり戦前の姿に復元した方がいいのじゃないかという意見が各方面から出されて、結局、26年の12月から新発足したわけです。

まァ、一言でいえば、湊川温泉劇場は、庶民のための神戸名物といえるんじゃないですか。今はやりのヘルスセンターの先駆けともいえるでしょう。しかし、こういうとさしさわりがあるかもしれないけど、売春防止法以来、福原のさびれ方がひどいでしょう。昔は、福原で遊んだ連中が朝帰りに、ここでひと風呂あびてということが多かったんですが、最近はそれがめっきり減りましたね。これはやっぱり痛いですよ」

◇　◇　◇

神戸唯一の寄席の劇場、松竹座の隣りに湊川伝道館というのがある。「我は道なり」「我に来たれ」というネオンが輝いている。昼間はひっそりとしているが、夜はそこが街頭伝道の場所になる。小さな壇に外人の牧師が立っている。そのまわりをたいこやアコーディオンをかかえた信者が数人とりかこんでいる。牧師はたどたどしい日本語でキリストの教えを伝える。

「ミナサン、ミナサンハナンノタメニ生キテイルノカ知ッテイマスカ」

「人間ノ苦シミハナニヨッテ救ワレルノデショウカ？　オ金？　チガイマス。政治ニヨッテデショウカ？　モチロンチガイマス。ソレラハトモニ人間ヲダラクサセルノデス。信ズルモノハ救ワレマス。我が主イエス・キ

「我に来たれ」の教えにじっと耳を傾ける新開地の人々

うなぎのかば焼の実演風景。新開地ではつねにどこかで人だかりがしている。

リストハ言ッテイマス。『我ハ道ナリ』ト……」

人々が立ちどまる。自転車をとめて、ちっと聞き入っている老人がある。二人。三人。五人。道に人だかりができる。ステテコスタイル、ぞうりばきのあんちゃんも珍しげに足をとめる。人がきを抜けでた女の子が、走りながら「信ズルモンズルモーノハ」と口真似をする。だれかが「こらッ。バチが当たるぞ」とどなる。

演説のさなかに、こんどはゴモク並べのおじさんがやってくる。伝道館の前に店を開く。大きな碁板に、大きな碁石がべたべた並ぶ。隅っこに「移動遊戯場認可証」の札をおく。説教にききいっていた人だかりが、ぞろっとゴモク並べに移る。折りたたんだ扇子でポンポン碁石を叩きながら、おじさんは、

「これは簡単。見ただけで分る。五ツ並んだら勝ち。二石で三四ができる。どこに打ったらええか。さあ、考えてちょうだい。景品つき五石並べ。さあ、どないや。ああいってこういく。こういってああいく。黒は二石。二石で三四。三からいくか四からいくか。ことは簡単。先に五つ並んだ方が勝ちや。さあ、だれかやらんか。景品つき五石並べ。勝ったら景品が出る。だれも分らん？　分らんことはない。黙ってみててもなんにも出ない。みるだけやったら、さっさと帰ってちょうだい。さあ、どうや。ヒントをいおうか。三引く四三で黒の勝ち。こんだけいうたら、もう分るやろ。さあ、どの三ひくか。景品つき五石ならべ」

休むまもなくしゃべりまくる。客人は神妙にみつめているばかり。

新開地は庶民の町である。私の印象でいえば、京都の新京極、大阪の新世界のあたりに雰囲気が似かよっているようである。ぞうりばきで、ぞろぞろ町を歩いている人が多いのもおもしろい。そういうムードは、新開地がドテと呼ばれていた昔からどうやら変らぬものらしい。スマートさとハイカラぶりを売りものにしている三宮、元町あたりと、どこか違っているのである。

だが、かつては神戸随一の歓楽街として栄えていた新開地も、最近は斜陽の声さえきかれようとしている。私が話をきいた商店主の多くも、将来の新開地については暗い見通ししかもてないと語るのである。神戸の中心がすっかり東へ移ってしまった今となっては、昔のような繁栄は望みにくくなったというのである。

ある商店主から聞いた話をひとつ。

「だいたい周辺の町が発展しすぎたということではないですかな。三宮とか元町とかにすっかりお株を奪われたかっこうです。オフィス街でなければ、商店街の繁栄もないんじゃないか、という気がします。湊川に市役所のあった時分はまだよかったんですけどねェ。

だいたい、新開地の商店には、高級品がない、柄のわるいものしかないというイメージがあるでしょう。それがずいぶん悪影響を残している。そうじゃない、ということを商店街としてももっとPRしなくてはいけないし実際に質のよい商品をそろえる努力が必要ですね。

それと、湊川公園をなんとかしなくては困りますね。いつまでも区役所が使っているのでは困る。今だと、フォークダンスとデモストレーションの集会場として役立っているだけですよ。この広大な公園をうまく利用すれば、新開地も繁栄するし、神戸にとっても得策ではないかと思うのですがねェ」

最後はちょっと、深刻な表情であった。

湊川公園の楠正成の像

伸びゆく 菊水総本店 瓦せんべい

瓦せんべいを創って
百年の歴史が地上四階
地下一階の近代的オートメイ
ションビルを完成しました

創業明治元年

株式会社
菊水総本店
TEL㉞1310・1382・9874

夏をチャームする
あなたの靴の
トリオです

靴と舶来雑貨 クロス
神戸 トア・ロード TEL ㉝ 0998
三宮地下街 10月1日開店
大阪 阪神百貨店 TEL(361)1201

きものと細貨

神戸　西店／TEL.③8836(代)
東京　東店／TEL.③0629
　　新橋店／TEL.(572)0807
　　銀座店／TEL.(571)5151(代)
　　小松ストア地階

おんがら屋

何から何まで
渋好みのパリッ子

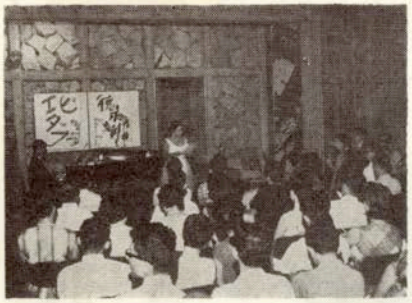
ボン・パリーは洋菓子の
本場フランスの味です
プドーと洋酒を上品に、
ミックスした風味あるお
菓子です

アルモンド

本　店　神戸市生田区元町通２の43
直売所　神戸大丸・新聞会館秀品店
本店ＴＥＬ㉝２２０３

神戸の集いから

★7の会
★徳永秀則
エピタッフ出版記念会



写真左上は黒田ナミエさんの独唱
写真左下は徳永氏の即興演奏

写真は徳永氏の指揮で演奏(?)された笑いのコーラス

写真右上はお化け屋ムードを出した会場風景
写真右下は“7の会”の司会をつとめる竹中郁氏左方に見えるのは“のぞき”風景。

★7の会

去年は8月に開かれ「8の会」だったが、今年は7月3日(土)に開催されて「7の会」

小原流家元会館の屋上ガーデンに大阪、神戸間の文化人約四百人が、百万弗夜景をサカナに、サントリービールのホップを味わい、吉原製油提供のおつまみで交歓会をひらいた。

会場は具体の作品と具体の人たちのアイディアでお化けムードがいっぱい。昔懐しい「のぞき」や、舞台では手品、万才が演じられた。竹中郁氏の司会で、東京からかけつけた田村孝之介氏夫妻が、「一番遠くからかけつけた人」と表彰され、ヤンヤの拍手を浴びる。田村氏も「年に一度、七夕様ではないが皆の懐しい顔を見、声が聞けるので、知らず知らずのうちに足が〝7の会〟へ向いていましたよ」と楽しそうである。去年の倍の出席率に主催サントリーの藤本義一氏もテンテコ舞いの忙しさだった。

★徳永秀則エピタッフ出版記念会

7月10日(土)久びさの梅雨の晴れ間に、小原流家元会館で、神戸の作曲家徳永秀則氏の作曲楽譜「エピタッフ」の出版を祝い楽しむ集いが開かれた。プログラムは第一部は徳永氏の近年の作品中から、64年度芸術祭参加作品〝石の人〟がテープで再生。また歌曲三点が、黒田ナミエさんの独唱、物部一郎氏のピアノで演奏された。また最後に徳永氏のピアノ即興演奏があり、高度な才能の奔放さが聴衆をとらえた。

第二部は秩序ただしいパーティと命名されて詩人君本昌久氏の司会でまず原口ちから師の20分間の仮葬が行なわれガーデンパーティの中央舞台に棺桶をおいて厳しゅくに行なわれ、20分後飛出した原口師を拍手で迎えた。

「エピタッフ」は原口師が私が死ぬときは経などあげずに音楽を演奏してほしいということがきっかけで、徳永氏が作曲したもの。そこでこの機に原口師が仮死亡通知を出したうえ、実演した訳である。やはりあまり気持のいいものではないとのこと。また徳永氏の指揮で、笑いと泣きの即興シンフォニーがくりひろげられ、数々の珍芸が披露された。出席者は津高和一、中西勝、安水稔和、赤尾兜子、杜山悠、陳舜臣、伊藤誠など友人、知人またファンが夜8時過ぎまでつめかけ、楽しんだ。

映画のこと 手当り次第 (19)

淀川長治

戦後二十年。映画とその二十年の足跡……となると簡単に書けるものではない。それで「私の」それも妙に忘れ得ぬ私なりの想い出のメモ帳でお許し願いたい。

戦争が終った時にはシャクにさわった。それから二カ月くらいたったであろうか、アメリカ兵のトラックが十数台私の住む郊外地を通過。それがエンコしてストップ外はガヤガヤザワザワ。隣り近所は雨戸をピシャン。表通りは猫の子一匹いない。私はそのガヤガヤザワザワの久しぶりに聞く「トーキー」の誘惑にひかれ外にしのび出た。とたんに包囲。ここは何処か。アイス・クリームは売っていないかetc。こんどはこちら「君たちの故郷は?」「俺たちみんなシカゴ」そこで私「おおエンジェルたち」相手キョトンついでニヤリ「サンキュウ」私すかさず「ウイズ・ダーテイ・フェイシス」とたんに連中巨体をゆるがしワッハッハッハ。「エンジェルス・ウイズ・ダーテイ・フェイシス」とはジェイムス・ギャグニイ主演のシカゴのギャングを描いた「汚れた顔の天使」。そこで一人がギャグニイのまねをして見せた。

そのうちに私の家の近くにもキャンプが出来、兵隊が道を聞いたりして、数人の友人ができた。みんな映画狂。私は映画のスチールをたくさん持っていて、その一枚にグリア・ガースンがあった。もちろんそのころはまだ彼女の映画は一本も見ていない。これを見た一人が叫声をあげた。この兵隊、寝ても醒めても彼女のファン。これを貰えぬかともみ手。そこでジャズのレコード五枚かまたはチョコレート五箱となら交換と冗談に大きく出た。するとその日のうちにこのG・Iはチョコレート五箱とさらに腹の中にかくしてジャズのレコード五枚を持ってきた。

明けて昭和二十一年の三月。ダービンの「春の序曲」とあのガースンの「キューリー夫人」でアメリカ映画は再登場した。

戦後六年たってハリウッドへ行った。旅行ぎらいの私はアメリカなんぞに行くと思うとゾッとして羽田の飛行機がパタンと扉を閉めたとき棺桶のふたが閉まった気になった。それでハリウッドでグリア・ガースン邸に招かれて浮かれ、喜びガースンのピアノで彼女と英国婦人記者と私の三人で「三匹のめくらの鼠」をあきれたことに合唱した。しながらチラッとガースンを眺めチョコレートとレコードを想い出した。やがてガースンに代って中年紳士が「これを知っています」とピアノに向ってひきだしたのが「ここはお国の何百里」。ガースンがビューティフル・メロディと囁く。妙なこと。

日本にもやがてどんどんスターが来るようになった。ボブ・ホープがきたとき、コカコーラの日本支店勤めのアメリカ人の車で逢いに出かけた。運転台に二人ならんで映画談。そこであと三〇分この車の走っているあいだ「スターの名前のいいっこ競争」途中つまったら負け。こっちは自信百パーセント。ところが向うに着くまでこのアメリカの一市民たるおっさんついに一度もとちりなし。互いに八十名以上のスターの名を瞬間の早さでいい合った。

忘れもしない昭和二十六年の二月にこっそりジョン・フォードが日本にやって来た。当時の新聞はこれを十行のニュースで小さく紹介。びっくりとび上った。そこでホテルに電話。すると電話に本人が出たのでも一度とび上った。あとでホテルで三〇分間ぴったり寄りそってインタビューというよりも三〇年の愛人に逢ったこうふんで語り合った。ひどかったのは最初の電話。自己紹介直後に言葉につまって「貴方は、ハリー・ケリーを御存知ですか」。相手一瞬言葉につまって「イエス・オブ・コース！」

このあと半年たって私はハリウッドに行ったのだが、またもその後一年あまりで、しょうこりもなくまた出かけることとなり、こんどは少し道楽気を出してグロォリア・スワンスンやチャップリンの古い相手役のエドナ・パーヴィアンスや、大昔の早川雪洲の相手役のベシー・ラブなどを訪ねた。それであちらの連中に「おババ狂」のアダ名をつけられた。しかしこの旅行の最も忘れ得ぬ想い出はチャップリンの「ライムライト」のセットで彼の本番演技をこの目で見たことであった。見ているうちに涙がこぼれだした。彼は本番を終るやいなや走りより私を抱え「おおスイート・ボーイ」。私が泣いたのは彼が「しゃべり」彼の頭上に「マイク」がさがり、ああこの世界的なサイレントの王様が、そう思ったそのときのその場の彼の台詞が「タイム・イズ・グレイト・アーサー……」時こそは偉大なる作家である。老いたるは去り、若者はめでたく結ばれて……この台詞が私の胸をさらにつまらせたわけである。いい年をした私が「スイート・ボーイ」などといわれたその「ボーイ」に彼もまた古きサイレントの彼のすべてを愛してきた私の少年時代をもくみとって、私にそう呼んで抱いてくれたのでもあろう。などと一人ぎめもまさにスィート・ボーイ。

「ライム・ライト」の左キートン、右チャップリン

戦後のシネラマ、立体、シネスコ、七〇ミリへの変転もさるものながら、コクトオの「美女と野獣」、英国バレエの「赤い靴」、イタリア映画のネオ・リアリズムとこの二十年を語るには……あまりにも語るは多く……で困りました。

〈映画評論家〉